

《外国からやってきた歌》

「家路」は、ドヴォルザークの交響曲第 9 番《新世界より》第 2 楽章の旋律を、弟子でもあったアメリカ人作曲家フィッシャーが 1922 年に歌詞をつけて編曲したもの。日本には 1930 年代に紹介され、数多くの日本語歌詞が作られたが、なかでも最も有名なものが「遠き山に日は落ちて」で知られる堀内敬三のもの。

「アヴィニョンの橋の上で」は、15 世紀頃に作られたフランス民謡。アヴィニョンは、フランス南東部のプロヴァンス地方にある古都で、そこを流れるローヌ川に架かっていた石造りのサン・ベネゼ橋が歌われている。橋が完成したとき、人々はこの歌を歌って喜んだという。日本語の歌詞も多数作られたが、本曲は東京出身の童謡詩人・小林純一による。

「久しき昔」は 1833 年、イングランドの作曲家トマス・ヘインズ・ベイリーが作詞作曲。「ロング・ロング・アゴー」のタイトルで器楽曲としてもおなじみ。日本には 1887 年に初めて紹介され、1913 年、近藤朔風による歌詞が発表され、広く愛唱されるようになった。

「遠い道を(悲しき天使)」は 1910～20 年頃、ポドレフスキーの詩にボリス・フォミンが付曲。「遠い道を」は原題の訳で、青春を懐かしむセンチメンタルな歌。長らくロシア民謡として扱われたが、1968 年にイギリスのメリー・ホプキンが歌って大ヒットした(「Those were the days」)。その際、邦題「悲しき天使」が付けられたが、歌詞の内容とは特に関係ない。

「なつかしき愛の歌」は、アイルランド出身の作曲家モロイの曲、イギリスの童謡詩人ビングムの詞。1884 年に発表されると水夫の間でヒットして、英語圏で愛唱された。日本では藤山一郎の歌で 1952 年にレコード化され、野上彰の訳詞が使われた。今回は近藤玲二の訳詞。

「アメイジング・グレイス」(作曲者不詳)は、アイルランドもしくはスコットランドの民謡をもとに作られたなど、由来には諸説ある。作詞はイギリスの牧師ジョン・ニュートン。彼は奴隷貿易に携わっていたが、改悔して牧師となり、1772 年この詞をつけた。世界でも最も親しまれている讃美歌の一つで、日本語歌詞は演出家で作詞家の海野洋司による。

「アリラン」は、日本でも有名な朝鮮半島民謡。「アリラン」の語源は諸説あるが、伝説上のアリラン峠が歌われているという。1926 年の映画『アリラン』によって広く知られるようになったが、歌詞は地域ごとに様々なバージョンがある。今回は寺嶋陸也の訳詞でお届けする。

「草原情歌」は、カザフ族の民謡をもとに 1938 年、王洛賓が作詞作曲したもので、中国民謡として親しまれている。日本では、ザ・ピーナッツが 1961 年にシングル B 面として発表、さらに 1983 年には NHK『みんなのうた』で馮智英(ひょう・ちえ)が歌って知られるようになった。

「線路は続くよどこまでも」はアメリカ西部開拓期、大陸横断鉄道の建設に携わったアイリッシュの労働歌だった。それが西部劇のドラマ主題歌として日本に輸入され、1962 年に NHK『みんなのうた』で紹介されて親しまれるようになった。作詞の佐木敏は、『みんなのうた』のディレクターだった後藤田純生のペンネーム。詞は高見映(ノッポさん)による原案をもとにスタッフが練り上げたという。

「故郷の人々」は「スワニー河」の別名でも知られ、フロリダ州の州歌にもなっている。「アメリカ音楽の父」スティーブン・フォスターが作詞作曲して 1851 年に出版。当時アメリカで流行していた minstrel・ショーのために書かれた曲で、黒人奴隷が故郷を懐かしむ内容となっている。日本では 1949 年、勝承夫の訳詞で

「故郷の人々」として発表された。今回は堀内敬三による格調高い日本語歌詞。

「オールド・ブラック・ジョー」もフォスターの作詞作曲で、やはり黒人奴隷に材をとっている。南北戦争の始まる前年、1860 年に出版。ジョー爺さんが今生を去る間際、先に逝った友らの呼ぶ声を聞く、という厳かな歌。訳詞の緒園涼子(おぞの・りょうし)は兵庫県の出身で、フォスターの訳詞を多く手がけた。

「美しく青きドナウ」は 1867 年、ヨハン・シュトラウス 2 世が作曲した男声合唱付きワルツで、「三大ワルツ」の一つとされる。ウィーンの男声合唱団の依頼で作曲され、歌詞は同合唱団の関係者による。今回は、日本人にはおなじみの堀内敬三の日本語歌詞でお届けする。